



当資料の転載、複製、改変等は禁止いたします。

一、血について

中医学では、人体は気・血・津液という成分により構成されていると考えます。言い換えれば、気は生体のエネルギー、血は血液、津液は血液の構成成分を含む、正常な体液成分です。これらの成分がバランスよく身体に満たされ、うまく働くことで、人体は健康を維持できると考えます。

中医学でいう「血」は、脈中を流れる赤い液体で、身体を構成し、生命活動を維持する基本的な物質と考えます。現代医学でいう「血液」とほぼ同じであると考えても良いでしょう。

気・血と臓腑・経絡は密接な関係がある。

(一) 血の生成と臓腑の関係

血の組成は主に中焦の水谷精気により、身体に栄養を与える「営気」、及び身体を潤す「津液」を主成分で組成し、故に「脾胃は気血生化の源」と称されます。又、腎精と血は互いに転化できます。故に、「精血同源」という。

- 1、脾胃は血の原料である水穀の精微を生み出す。
- 2、腎は精を蔵し、精は血を生む（精血同源）。
- 3、肺は百脈を集め、酸素（精気）を与える。
- 4、脈は血を住ませ、血の通路となる。

(二) 血の循行と臓腑の関係

- 1、「心は血脈を主る」、心気の推动作用によって血液が送り出される。
- 2、肺に全身の血液が血脈を通過して集まり、酸素を吸収して全身に送り出す。
- 3、「脾の統血作用」、脾は肺氣の固攝作用により、血液が脈管外に漏れでないように調整している。この機能が低下すると、出血傾向の原因になる。
- 4、「肝の疏泄作用」、氣の運動を円滑にして流れを正常に保つ。「肝は血を蔵す」、肝に血液が貯蔵され、血流量を調節している。

(三) 血の機能 (栄養・滋潤作用)

血は極めて豊富な栄養と滋潤作用を持っています。また、全身の臓腑・経絡・皮膚・筋肉や精神活動（現代医学と異なる）の物質基礎でもあります。

- 「血は之を濡すを主る」《難経》。血は土に水がしみこむごとく、全身を潤し、栄養する。
「脈通ぜざれば則ち血流れず。血流れざれば則ち髪色澤ならず」《靈枢》 五臓六腑、皮毛、毛髮、筋肉を潤している。
- 老人の皮膚掻痒症などは血虚により、皮膚が潤されないために起こる。

血は感覚と運動の物質的基礎

- 「肝は目に開竅する」「肝は血を受けて能く視、足は血を受けて能く歩み、掌は血を受けて能く握り、指は血を受けて能く摂る」《素問》目が物をよく見ることができるのは、肝が血によって栄養物質を受けてはじめて可能になる。手は掌に血を受けて握ることができ、足は血を受けて歩くことができる。
- 四肢の麻痺や関節の運動障害などの多くは血の濡養作用の不足によって起こる。坐骨神経痛や椎間狭窄症候群には、去風湿薬に補血剤・補気薬を用いた後、補腎剤を用いる。

血は神志活動の物質的基礎

- 「血氣は人の精神活動の本である」「心は血脈を主り、神明を主る」《素問》
血脈が充溢すれば、精神が安定する。
- 「驚けば則ち、心による所なく、神に帰する所なく、定まる所なし。故に氣乱れるなり」
血が不足すると、多夢・健忘・動悸（驚きやすいこと）などの精神不安の症状が現れる。

(四) 血病の弁証

臨床では、血の病証をやはり虚証と実証に分け、**虚証**とは血の不足のこと、血虚証である。**実証**は血行不暢、或は内出血で血が身体のどこかに溜まることの血瘀証と血熱証、血寒証（けっかんしょう）などがあります。

二、血虚について

血虚証とは、血の不足によって臓腑、経脈が滋養されないために生じる全身虚弱を表わす証候である。

血が不足となる原因は生成の不足と使い過ぎです。生成の不足は、先天の不足、慢性病や食事の不摂生、脾胃の虚弱、或は瘀血で新血の生成を妨げるなどが原因である。使い過ぎというのは、慢性出血、或は久病や思慮過度などで血を消耗し過ぎ、腸の寄生虫病などが原因です。

(一) 血虚の病因

- ①生血不足：脾胃の虚弱で消化機能が弱く、食べても栄養が吸収されにくい。
- ②出血過多：出血により一時的に血液が補充出来ない。
- ③血液の消耗：久病や七情過度になって血液を消耗する。

(二) 血虚の症状

血の不足及び栄養滋潤作用の低下である。

症状は、顔色蒼白或いは萎黄・艶がない、白っぽい、唇や爪の色がうすい・目がかすみ、めまいがする、眩暈・心悸・不眠・手足のしびれ・月経失調（過少月経、周期の遅れ、閉経）・舌淡白舌体は薄く瘦せている・脈が細無力などがある。

【多様な血虚の病態】

主に婦人科領域で使用されていた**四物湯**は、『景岳全書』（1624）の頃から女性だけではなく、男性も含めた自律神経・内分泌の異常に用いられるようになりました。しかも「血虚発熱」という不可思議な病態にまで四物湯を含む方剤が適応となったのです。その使われ方をみると、血虚とは血が足りないとか、物質的基礎の不足ということよりも、その内容は様々な病態を網羅し、主として“自律神経および内分泌系の失調”を意味しているように思われます。

【血虚の特徴】

いくら食べても肥らない。要するに食べて同化する量より、消費するエネルギー（異化作用）のほうが多いのです。さらに体内の水分も少ないようです。

皮脂の分泌が悪いものも血虚と云います。皮膚が乾燥しているのは、血が少なく皮膚に栄養が行き渡らないためと、昔の人は考えたようです。当帰、地黄などの補血薬には潤肌効果があります。皮脂の分泌を良くして皮膚が滑らかになります。それから血虚を貧血のみではない。出血して貧血となり、血漿のタンパク質が減少すれば浮腫が生じて、皮膚の色は蒼白となり、体はむしろ水分が多くて気虚となります。すなわち血虚の乾燥とは反対になるのです。

(三) 血虚の治療

血虚証の治療法は、血を補う又は、養うという方法で、補血、養血となります。

補 血：四物湯
心血虚：人参養栄湯、
肝血虚：補肝湯
心脾両虚：帰脾湯

-

婦人の聖薬としての四物湯（和剤局方）

【意識】

栄養作用と防衛機構を調整強化し、生理機能および血液の栄養作用を養い育て、衝脈任脈（月経・妊娠を司る）の損傷による月経異常、下腹部痛、多量の性器出血または少量の持続性性器出血、腹中で血液が凝固して塊を生じ、間欠的な疼痛があり、妊娠したが元から冷えがあり、養生法が適切でなく、切迫流産のため出血が止まらず、更に産後抵抗力の低下に乗じて風悪の邪が体内を侵し、悪露が排出されないで硬い塊を生じ（これはあくまで昔の人が考えた仮説です）で下腹部が堅く痛み、時に往来寒熱（悪寒と 発熱が交互に出現）が認められる症状を治す。

[解 説]

不正性器出血に芎歸膠艾湯を使用しているうちに、どうやら婦人の月経過多・月経周期の異常・月経困難症などにも効くことがわかり、四物湯には月経調節作用（衝任の失調を治す）があることが明らかとなりました。さらに妊娠中や産後の出血のような器質的病態のみならず、血の道症や更年期症候群などの自律神経失調症にまで広く応用されるようになりました。したがって『和剤局方』には、四物湯は婦人の月経障害・腹痛・子宮出血・妊娠中の異常・流産・産後の障害などを治療すると書かれています。四物湯は婦人の聖薬である。

四物湯（和剤局方）

【組成】 当帰 川芎 芍薬 地黄

【解説】

四物湯は血虚の基本方剤です。血虚という病態は俗説の貧血でもある、身体の営業物質的不足であり、主として自律神経系や内分泌系の失調状態を示すものでしょう。一般的には四物湯は単独で用いるか、加減もしくは合方するか、もしくはその一部を用いて四物湯の方意を含んだ方剤として使用されることが多いのです。

したがって、われわれは様々な方剤の中で四物湯がどういう意図で使われているのかを推測し、実際の臨床の中から四物湯の適応症を学ばなければいけません。

【構 造】

- (1) 当帰・川芎 …… 補血活血作用
- (2) 芍薬・地黄 …… 補血柔肝養陰作用
- (3) 当帰・川芎・地黄 …… 月経調節作用（自律神経・内分泌系の調整）
- (4) 当帰・地黄・芍薬 …… 滋養作用（補陰）

【応 用】

- 1) 皮膚の老化を防ぐ …… 当帰飲子
- 2) 運動麻痺・骨や筋肉の委縮に対して
…… 疎経活血湯、十全大補湯、大防風湯、独活寄生湯
- 3) 月経異常を治す
- 4) 止血作用 …… 芎帰膠艾湯
- 5) 慢性炎症性疾患に対して …… 温清飲加減

【適応症】

1) 皮膚疾患

皮膚の老化や萎縮のために水分保有能ならびに皮脂分泌が低下し、皮膚は乾燥し落屑、亀裂を生じて痒みを生じる（当帰飲子）。また潰瘍や骨折で肉芽増殖が悪いときにも適用。

2) 骨・関節・筋肉疾患

古人は、四肢は血を得てよく動くと考えた。そして血が養うことができないうために麻痺が生じると考え、これを血虚と判断したのであろう。疎経活血湯、十全大補湯、大防風湯など。

3) 発熱または炎症性疾患

物質代謝が亢進して、体温が上昇したり身体が熱く煩り、熱症状を呈するものを、“血虚の発熱“といい、熱症状の甚だしいものを”陰虚“という。朝は冷えて午後

に発熱し、手掌と足底 ならびに胸中が火照るという特徴がある。ベーチェット病でアフタ性口内炎を繰り返すものに黄連解毒湯を合方して温清飲加減として適用する。

4) 栄養障害と脱水症

慢性疾患による栄養障害のため、皮膚がカサカサで骨格筋に痩せ、または萎縮があり、体内水分量が低下したときに、十全大補湯として適用する。



ご清聴ありがとうございました！